

「日本地域デザイン史はものづくり「知」の宝庫」

澁谷 邦夫 著 美学出版 2020年12月発行

私がこの本を読み終えてまず思った感想です。「旭川」、すげーじゃん。

本校は工業高等専門学校ですから、例えば機械システム工学科の方であれば日々、「こうやったら滑らかに動く」「こうやったら壊れない機械になる」なんてことを日々学んでいると思います。でも、それって当たり前の事なんですよ。我々の造った製品を壊れるかも？なんて思ってドキドキしながら使う人なんて殆どいなくて、「使いやすい」「カッコいい」「生活が豊かになる」なんてことで製品は選ばれます。つまり「当たり前品質」と「付加価値品質」です。

私はこの本を読んで、この付加価値をどのように魅せるか、がデザインであるという事に気づきました。もちろん見た目がカッコいい、かわいい、も審美デザインですが、製品の使われ方も含めてデザインなわけですね。

そして、その「ものづくり」から導かれるデザイン、筆者の澁谷先生は日産自動車で自動車のデザインを手がけられ、これを旭川の街づくりに昇華されました。旭川にずっと住んでいると分からないかもしれませんが、よそから来た私が見ると旭川ってとっても「カッコいい」街、なんで旭川がカッコよくなったのか、その理論のエッセンスがここにかいてあります。

その中でも地域デザイン発生の「主要因」を分析し、国内の並み居る主要都市に対し旭川の何が優れ、何が足りないのか、どうして旭川がこうようになってきたのかというまちづくりデザインがかいてあります。

デザイン、みなさんがこれからつくる「製品」の価値を決める一番重要な部分なのですが、なかなか本校内で学ぶ機会は少ないです。デザインってデザイナーがなんとなく感覚で決めてるんじゃないか？とっていたかもしれませんが、ここにはその理論と実例が書いてあります。

この本を読んで旭川の街中を歩くと結構いろんな発見がありますよ。